

グロスター公リチャードの北部イングランド掌握

石原孝哉

I

シェイクスピアは『ヘンリー六世第三部』と『リチャード三世』にグロスター公リチャードを登場させているが、この両作品とも北部の領主としてのリチャードについてはほとんど言及していない。北部の領主としてのリチャードは有能で、善意と正義を貫いて政治を行い、スコットランドからの侵略を跳ね返し、エディンバラまで攻め上ってスコットランドを屈服させるなど輝かしい武勲を立てている。シェイクスピア、ないし彼が依拠したテューダー王朝時代の歴史家にとっては、こうしたリチャード像は都合の悪いもので、彼らが無視するのは当然であった。しかしながら、史実の中のリチャードが王位に登りつめる段階でもっとも頼りにしたのは、ヨークシャーを中心とする北部からの人的、経済的な支援であり、一方、その後の北部人脈優遇政策が、逆に南部の反感を招いて臣民の支持を失ったこともまた事実である。このような視点に立てば、この問題はボズワースへの道のりの重要な一里塚であり、決して無視するわけにはいかない。ここでは、1471年から1483年の間の、北部の有力貴族としてのグロスター公リチャードに焦点を当ててみたい。

II

リチャードは兄エドワードがイングランドの王位についた1461年、9歳のときにグロスター公に叙爵されたが、グロスターシャーにはほとんど縁はなかったようで、訪問や滞在の記録は残っていない。当時の貴族の習慣で、形式

的に称号が与えられただけであるから、これは当然かもしれない。ちなみに、グロスターシャーのサドベリー城を含む領地が与えられたのは18歳になってからである。

幼年期のリチャードは、バラ戦争という巨大な渦に巻き込まれた父ヨーク公リチャードの浮沈とともに各地を転々としていた。兄エドワードがタウトンの戦で大勝利し、事実上第1次内乱が終了したときにも、まだ家族とともにオランダのユトレヒトに身を潜めていた。イングランドに戻ったリチャードは、1464年頃、ヨーク派の実力者、ウオーリック伯リチャード・ネヴィルの下で暮らすようになった。

これが、リチャードの運命を生涯決定付けるようになった北部との出会いであった。ウオーリック伯の居城であるヨークシャーのミドルハム城での生活が多感な少年にさまざまな影響を与えたことは想像に難くない。特にウオーリック伯の次女で、後にリチャードと結婚することになるアンとの邂逅は運命的でさえあった。ジーン・プレイディ (Jean Plaidy 1906-93) の小説⁽¹⁾のように、多感な少年少女がこの城で暮らすうちに恋心を育んでいったかどうかは定かでないが、ランカスター家とヨーク家が一進一退の激戦を繰り広げる戦乱の世に、ひとつの城にこもって生活することは、絆を強め、相互理解を深めたことだけは間違いない。

さて、この城には他にも多くの貴族の子弟が養育されていた。彼らはヘンチマン (henchman) と呼ばれ、ここで貴族としての一通りの教育を身につけるのであった。彼らの教育係はマスター・オヴ・ヘンチマン (Master of Henxmen) とよばれ、乗馬、騎士道精神、教養などを教えた。⁽²⁾ 例えば乗馬では、馬具のつけ方に始まって、馬上で弓、槍、剣など武器の扱いはもとより、確実にしかも美しく騎乗する技術といった上流階級ならではの用件が含まれていた。鹿狩り、兎狩り、狐狩りなどを含む狩猟は、戦場での馬の扱いの実践訓練の場となっていた。教育の根幹をなすのは騎士道精神であったが、これは単なる精神教育ではなく、礼儀作法、言葉遣い、立ち居振る舞いから威厳ある態度の保ち方、貴族や家来との接し方などすぐに役立つ実用教育であった。教養には、神学、

歴史、外国語、文学など当時のパブリック・スクール程度の教育、およびハー
プ、管楽器、歌唱、ダンスなど社交のほか、正しいテーブル・マナーといった
貴族としての素養が含まれていた。夜明けとともに起床し、午前中は学問のほ
か、剣や槍などの武具の扱いを含む武芸、午後は狩猟を中心とする馬上訓練、
夕方からはダンスや音楽を含む社交儀礼といった日課が若者たちを厳しく拘束
していた。

ちなみに、ウオーリック伯家のような大貴族の館には200人ほどが働き、
身分のある者は大ホールで会食した。席は身分によって厳しく定められ、マス
ター・オヴ・ヘンチマンが少年たちの食事作法に目を光らせていた。一般にディ
ナーは昼食で、牛6頭が毎日屠られて食卓に供されたというからその規模が
わかるであろう。

ミドルハム城とともにヘンチマンとして過ごした時代の仲間にフランシ
ス・ラヴェル (Francis Lovell 1454-87?) がいる。リチャードの交友関係は北
部出身の人々が極めて多いが、その中で自他共に親友として認めているのが
フランシスであった。⁽³⁾ ラヴェル家の古くからの主な所領はノーザンプトン
(Northampton) やシュロップシャー (Shropshire) で、オクスフォードの近く
には今でもその居城跡がミンスター・ラヴェル (Minster Lovell) として残っ
ている。しかし、祖母の遺産としてデインコート (Deincourt) やグレイ・オヴ・
ロザフィールド (Grey of Rotherfield) といった北部の有力な男爵領を相続し、
ヨークシャーやリンカンシャーに広大な所領を獲得した。そんな訳でフランシ
スも北部の実力者、ウオーリック伯の下で修行していたのである。このような
環境の中でリチャードとフランシスの間に友情が芽生えていったとしても不思議
はない。リチャードのスコットランド遠征に際してはその指揮下で戦い、リ
チャードから騎士の称号を得ている。1483年1月にエドワード四世はフラン
シスに子爵の称号を与えたが、おそらくリチャードの推薦があったものであろ
う。

しかしもっとも特筆すべきは、国王となったリチャードがフランシスに最高
勲章であるガーター勲章 (The Order of Garter) を与え、宮内長官 (Chamberlain

of Household) に抜擢したことであろう。この職は常時国王の側近にはべり、その影響力も絶大であることから、もっとも信頼のおける人物が任命されるのが慣わしであった。ここからもリチャードがいかに彼を信頼していたかがわかる。かくして彼の言葉は国王の代理人としての影響力を持ち、人々は彼の寵愛を得るために群がり、その怒りは人々を震え上がらせた。

フランシス・ラヴェルはバッキンガム公の反乱の際、あるいはボズワースの戦いの際に活躍したことが知られているが、彼の名をあまねく後世に知らしめたのは、奇しくもリチャードの死後であった。すなわち、フランシスは、1485年のボズワースの戦いでリチャード三世を倒したリッチモンド伯がヘンリー七世としてテューダー王朝を設立した後も、ヨーク派の残党を率いて戦い続けた。このことが忠実なるヨーク派として彼の名を高めたのである。実際、1486年のヨークシャーにおける反乱では、もう一歩でヘンリー七世を捕獲するまで行ったが、惜しくも長蛇を逸している。この反乱は鎮圧されたが、しぶとく生き残ったフランシスはブルゴーニュ公妃、マーガレットの援助を受け、同じくヨーク派の貴族で、リチャードの甥に当たるリンカン伯ジョン・ド・ラポール (John de la Pole 1462-87) 等とともに、ランバート・シムネル (Lambert Simnel c.1477-c.1525) という王位僭称者を擁して再び反乱を起こした。これが有名なストウク・フィールドの戦い (The Battle of Stoke Field, 1487,6,16) である。この反乱はヨーク派の組織だった最後の反乱であったが、王軍に鎮圧された。フランシスはこの戦いで死んだことになっているが、伝説ではその後も生き延びて数奇な運命を辿ったといわれている。

ミドルハム城で暮らしたころ知り合って、後にリチャードの側近となった若者はかなり多く、たとえば、リチャード・フィッツヒュー (Richard FitzHugh c.1458-1487)、トマス・スクロップ・オヴ・マサム (Thomas Scrope of Masham c.1459-93)、ラルフ・グレイストウク (Ralph Greystoke)、ハンフリー・ダクレ・オヴ・グルズランド (Humphrey Dacre of Glisland ?-1485) などがある。

このほかにもリチャードが伯爵家にいたころに知り合ったと思われる家来にトマス・ハドルストン (Thomas Huddleston) とトマス・パー (Thomas Parr)

がいる。彼らはともにカンバーランドの有力な一族の息子で、ウオーリック伯爵家に仕えていた。⁽⁴⁾ 二人は年齢がリチャードに近く、伯爵家ではリチャードの取り巻き、ないし話し相手として遇されていたものと思われる。彼らがいづのころから伯爵家の家来から、リチャード直属の家来になったかは不明であるが、バーネットの戦い（The Battle of Barnet 1471）ではウオーリック伯と袂を分かち、18歳のリチャードの配下として戦っている。リチャードは後に、バーネットの戦とテュークスベリの戦（The Battle of Tewkesbury 1471）で彼のために戦死した部下の冥福を祈るための寄進を行っている。その祈祷名簿には5人の名前が載っているが、トマス・ハドルストンとトマス・パーの名前がある。他の3人は、ジョン・マイルウォーター（John Milewater）、ジョン・ハーパーズ（John Harpers）、それにクリストファー・ウーズリィ（Christopher Worsley）である。トマス・パーとジョン・マイルウォーターはリチャードの従者として戦死した。このことから彼らがリチャードの側近中の側近だったことがわかる。ハドルストーン一族は1470年代になって急速にリチャードに接近した一族であったが、1460年代にはウオーリック伯、クラレンス公ジョージの反乱を支援して、一時領地を没収されたこともあった。しかし、エドワード四世の王位復帰で、改めてリチャードに仕えると次第に有力な家臣となってゆく。トマス・ハドルストンの父、サー・ジョン・ハドルストン（Sir John Huddleston）は、1477年にリチャードがケンブリッジ大学のクイーンズ・コレッジに寄進をした際に、リチャードの代理人を勤めている。ちなみに、先の5人が寄進によって常に祈禱を受けるようになったのが、クイーンズ・コレッジであった。

リチャードが幼かったころはヨーク家の家臣が彼の世話をし、エドワード四世が即位してからは、国王に仕えていた古くからの家臣もリチャードの世話をするようになっていた。すでに述べたジョン・マイルウォーターもその一人である。彼はすでに1450年代に、リチャードの兄エドワードやエドマンドの世話をしていた家臣で、1469年のウエールズにおける騒乱のときもリチャードと行動をともにしている。おそらく、幼いリチャードがウオーリック伯家に預けられていたときすでに世話をしていたのかもしれない。

トマス・パーの一族も古くからのヨーク家の家臣であった。彼の二人の兄、ジョン・パー (John Parr) とウィリアム・パー (William Parr) はともにエドワード四世に仕え、後にリチャードの家臣となった。生き残った二人の兄は 1470 年代になるとリチャードの有力側近になってゆく。

ジョン・ピーク (John Peke) もこうした古い家来で、伯爵家でもリチャードに付き添っていたものと思われる。マイルウォーターと同じく、彼はヨーク公リチャードの時代からヨーク家に仕え、エドワード、ジョージ、エドモンドといったリチャードの兄たちの世話をしたこともある直参である。マイルウォーターは、バーネットの戦いのときは、すでにかかなりの年齢になっていたと思われるが、リチャードとともに戦場に出て非業の死を遂げた。リチャードにとってはかけがえのない忠臣であった。

リチャード・ラトクリフ (Richard Ratcliffe ? -1485) も古くからヨーク家と関係の深い家柄で、湖水地方のデアワントウォーター (Derwentwater) に屋敷があった。彼も 1473 年ないし 1478 年にはリチャードに仕えていたものと思われるが、テュークスベリーの戦いでは、エドワード四世から直接騎士の称号を賜っている。リチャードとの関係がはつきりするのには 1482 年のスコットランド遠征で、このとき彼はリチャードからバナレット騎士の称号を得ている。ラトクリフはリチャードに最も信頼されていた部下で、1483 年の第二次宮廷革命の際、リチャードの命令でヨークシャーに急行し、そこで軍隊を召集してロンドンに馳せ戻った。幼いエドワード五世を護衛していたリヴァース伯、グレイ卿等を殺害したことで有名だが、これはリチャードの指示を待たずに彼が独断でやったこととされている。⁽⁶⁾ しかしこの見解には異論もある。すなわち、ラトクリフはあらかじめリチャードからリヴァース伯等の処刑の委任状を得ていたとする説である。⁽⁷⁾ この時点ではまだエリザベス皇太后派、すなわちウッドヴィル派を肅清する機運が熟成しておらず、諮問会議もこれを認めていなかった。その中で処刑は、リチャードの命令がなければできないと考えるほうが自然であろう。

ジェイムズ・ティレル (James Tyrell c.1450-1502) は、シェイクスピアの劇

では、幼いエドワード五世とその弟のヨーク公を殺害した血も涙もない殺し屋として描かれているが、ラトクリフと同じくリチャードの側近である。彼もウオーリック伯の館でリチャードと知り合ったと思われるが、彼は北部人ではなく、東部のイプスウィッチ (Ipswich) の出身である。彼は、主馬の守、ヘンチマン、財務出納官を経て、ギネ城、カーディフ城、グラモーガン城、コーンウォール公領の軍事的、行政的責任者を歴任したリチャードの側近であったが、1485年の政変をうまく生き延び、ヘンリー七世に仕える事ができた。⁽⁸⁾ この处世術が彼を幸せにしたかどうかは、不明である。というのも、テューダー王朝になってから、反逆罪で処刑される運命にあったからである。処刑される前に、エドワード五世らをロンドン塔の中で殺害したと自白したとされるが、この問題については後で詳しく述べる。

ウィリアム・ケイツビィ (William Catesby) はウオーリック伯に仕えた由緒ある一族の長で、法律家であった。彼は北部人ではなかったが、妻のマーガレット (Margaret Catesby) はエリザベス・ズーチ (Elizabeth Zouche) の娘であった。妻の系譜には有力な北部人が居並び、その遠戚にはリチャードの母セシリー (Cecily Nevile) もいた。ケイツビィがいつからリチャードの配下になったかは明らかでないが、リチャードは彼を法律顧問、マーチ伯領執事、財務長官、下院議長と、次々に有力な地位を与え、最終的には年間 323 ポンドの収入が見込める所領を与えた。これは伯爵領に匹敵する所領であったが、彼の身分は議会、ないし宮廷に雇用される官吏であった。しかし、ダラム州においては文字通りリチャードの右腕であり、戴冠した後は側近として権力をほしいままにした。⁽⁹⁾

リチャード三世の時代に流布していた有名な童謡からも、彼らが以下に権力を振るったかが想像できる。

*“The catte, the rattte and Lovell our dogge,
rulyth all Englande under a hogge”.*

「猫と鼠と犬のラベルが、猪の下でイングランド全土を支配している」という意味である。Catte (=cat) は Catesby であり、ratte (=rat) は Ratcliffe, Lovell our dogge (=dog) は Francis Lovell の紋章が獵犬であることからそれを皮肉ったものである。hogge (=hog) は本来は豚であるが、ここでは猪、つまりリチャードの軍旗が白猪 (White Boar) であったところからリチャード三世のことである。前行が dogge で終わっているの、これと脚韻を踏んで hogge としたものである。

以上からわかるとおり、グロスター公リチャードの手となり、足となって、彼を権力の中樞に担っていったのが北部の人々、ないし彼が北部にいた時期に知遇を得た人々であったことがわかる。

III

グロスター公リチャードが北部に関する具体的な権利を確定したのは、1471年5月4日のテュークスベリーの戦で、エドワード四世率いるヨーク派がランカスター派に大勝し、第二次内乱が事実上終結した後であった。第二次内乱はウオーリック伯リチャード・ネヴィルがクラレンス公ジョージとランカスター派を巻き込んでエドワード四世に反旗を翻した内乱であったが、バーネットの戦でウオーリック伯自身が戦死して、戦の帰趨が決した。ランカスター派の残党を一掃して王位が安定すると、広大なウオーック伯の所領とその権限を誰に委譲するかが大きな政治問題となった。戦の一ヶ月後、エドワード四世は、故キング・メイカーの後継者として末弟のリチャードを当てる決意をした。次弟のクラレンス公ジョージはウオーリック公の娘イザベルと結婚しており、最適人者と思われたが、一時、ウオーリック伯と組んで反旗を翻したことで国王の信頼を失っていたからである。

国王の意志は、故ウオーリック伯が占有していた多くの権利をリチャードに付与することによって具体化していった。1471年から翌年にかけて、リチャードは多くの官職と領地を与えられた。

なかでも重要なのは海軍提督 (Admiral of England)、イングランド武官長 (Constable of England) という地位であった。武官長は単に治安・警察業務ばかりでなく、国王の不在時には国王に代わって軍を統括する重要な役割を担っていた。さらに、国王の側近中の側近である式部長官 (Great Chamberlain) にも就任したが、この地位はで、ウオーリック伯の遺産相続問題にまつわる兄クラレンス公との葛藤のなかで一旦クラレンス公に譲渡されたものであった。これらの一連の官職への就任は、ウオーリック伯の死によってもたらされた政治的な空白を埋めるのは、クラレンス公ではなく、リチャードであることを内外に示すものであった。⁽¹⁰⁾

エドワード四世はランカスター派に対する勝利の論功行賞において、リチャードの功績を非常に高く評価していた。このために領地についてもリチャードに極めて寛大であった。

29 June 1471: grant to Richard of Gloucester and heirs male of the castles, manors and lordships of Middleham and Sheriff Hutton, co. York, and Penrith, co. Cumberland. ⁽¹¹⁾

ここで注目すべきは、単なる領地の広さばかりでなく、ミドルハム城、シェリフ・ハットン城、ペンリス城といったかつてネヴィル一族の居城であった北部の要衝がすべてリチャードのものとなったことである。これらの城は、スコットランドに対する備えとして不可欠であるばかりでなく、ほかの北部貴族に対する抑えとして政治的にきわめて重要な拠点だからである。

1471年7月4日には、北部におけるランカスター公領主任執事 (Chief Steward of the Duchy of Lancaster) の地位がリチャードに与えられた。さらに、王がスタンリー卿から取り上げたランカッシャー内のパラティン州の公領主任執事もリチャードに与えられた。パラティン州とは、王国には属するが国王の直接権限が及ばない半独立領で、本来はウエールズやスコットランドに対する防衛手段として創設されたもので、権限も名誉も高い位である。これはスタン

リー卿が第二次内乱時にウオーリック伯に味方したことに対する強烈なしっぺ返しであったが、この措置が後にリチャードに対する不満として深く沈潜していくとは誰にも想像がつかなかった。

これに加えて1474年5月には、トレント川以北の王有林監督官という、かつてヘンリー・パーシィが所有していた官職もリチャードに与えられることになった。これで、故ウオーリック伯がトレント川以北に所有していた継嗣相続財産のほぼすべてがリチャードに与えられたことになった。しかしこれには複雑な法律的問題が付随していたために、そのすべてが公式にリチャードの手に入ったのは12年の歳月が必要であったことは前項で述べたとおりである。

1471年も余すところわずかとなった12月になって、リチャードにさらなる恩賞が与えられた。第13代オクスフォード伯ジョン・ド・ヴィア (John de Vere 1443-1513) の所領が没収され、リチャードに与えられたのである。⁽¹²⁾ オクスフォード伯は故ウオーリック伯の妹を妻にもつ有力貴族で、勇猛な指揮官として高名であった。パーネットの戦の折もウオーリック伯軍の右翼を指揮してヨーク派を散々に蹴散らした。このときは霧という天の助けもあってオクスフォード伯が本体と合流する前に大将ウオーリック伯が討ち取られてランカスター派は敗北したが、彼自身はフランスに逃れて虎視眈々と牙を磨いていた。彼に対する報復として、エドワード四世は、伯爵領の没収という強攻策をとった。彼の所領の中心は東部のエセックスにあり、80余の荘園から年間1000ポンドという収入が見込まれていたからリチャードにとってはありがたい領地であった。しかし、この恩賞もリチャードにとってはひとつの試練であった。この処置に怒ったオクスフォード伯は1473年にフランスから軍を率いてエセックス奪還を目指したからである。しかし、リチャードの指揮で、いちはやく万全の防備を固めたために、エセックスに上陸することを断念し、南に下ってコーンウォールのセント・マイケルズ・マウント (St Michael's Mount) 島を占領するという奇策に出た。これが有名なセント・マイケルズ・マウント竈城事件である。オクスフォード伯がなぜ取るに足らない小島を占拠したかはいまだに謎のままであるが、最も可能性が高いのは、フランス王の援助を得てイン

グランド侵攻作戦をする際にここを足がかりにしようとしたと思われる。当時は、クラレンス公ジョージが健在であり、エドワード四世を廃位して、クラレンスを擁立する計画を捨て切れなかったのかもしれない。しかし、頼みのルイ十一世は動かず、孤立無援のまま籠城は4ヶ月に及んだ。すべてが解決したのは1474年になってからで、オックスフォード伯は降伏した。エドワード四世はオックスフォード伯を殺さずに、カレーのハメス要塞に収監したが、この温情がヨーク王朝の終焉につながるとは夢想だにしなかった。それから10年余り、臥薪嘗胆の苦を忍んだオックスフォード伯は、要塞司令官サー・ジェイムズ・ブラウント（Sir James Blount）を説得して、ヘンリー・テューダーに寝返らせ、ボズワースの戦ではヘンリーに代わって事実上の総大将として決定的な役割を演じ、リチャード三世を滅ぼすからである。

テュークスベリーの戦の後、わずか半年間でリチャードに与えられた官職や所領がその後のリチャードの北部における覇権を確定する源となったことは確かである。その後もリチャードに対する国王の信頼はますますあつくなり、1473年には国王に代わって徴兵権が認められ、⁽¹³⁾ 1475年にはカンバーランドの終身行政長官に任ぜられている。⁽¹⁴⁾

こうして、北部におけるグロスター公リチャードは着々と地歩を固めていった。これはリチャードとウオーリック伯の娘アンとの結婚によってさらに強固なものとなった。もちろん結婚してすぐにウオーリック伯の遺産を手に入れたわけではなく、長年にわたる手続きが必要であった。この件の細かい経緯については既に述べたので詳細は省くが、この結婚によってリチャードのウオーリック伯の後継者としての地位は不動のものとなった。

それがさらに強化されたのは、リチャードが領地交換によって、北部に領地を集中したためである。リチャードの所領は、妻アンが父の故ウオーリック伯から相続した分を含めてイングランド各地に点在していた。もちろん、点在していても徴税などに問題はなかったが、兵の召集といった緊急事態にはこれははなはだ不都合であった。リチャードはエドワード四世と交渉して、それらのいくつかと北部の所領を交換した。このようにしてリチャードは領地や権

限を北部に集中していったのである。コティガム (Cottingham)、スカーバラ (Scarborough)、リッチモンド (Richmond)、ヘルムズリィ (Helmsley) といった北部の重要拠点はこのような形で後に入れたものである。特にスカーバラとリッチモンドには要害堅固な城があり、北部防衛の要であった。リッチモンド城はダラムの南に位置し、対スコットランドの重要拠点であった。ここはエドモンド・テューダーの城であり、その息子で、後にランカスター派の王位継承者を宣言することになるヘンリー・テューダー (後のヘンリー七世) が、城の所有権とリッチモンド伯位を主張していたものである。これをエドワード四世が没収して、クラレンス公ジョージに与え、クラレンス公の死後リチャードに与えられたという因縁の城である。ちなみに、リッチモンド伯を名乗っていたヘンリーが晴れてこの城を名実ともに支配したのは、ボズワースの戦でリチャードを破って、テューダー王朝を開いて後のことであった。

リチャードがウオーリック伯の後継者となると、かつて伯爵家に仕えた召使の多くがそのままグロスター公家の召使として働くこととなった。彼らのほとんどは地元ヨークシャーおよびその周辺のジェントリーで、代々ウオーリック伯家ないしソールズベリー伯家に仕えてきた者も多かった。

ミドルハム城を例にとってみよう。1473年から1474年の間に、ミドルハム城で俸給を得ていた36人の召使のうち22名は、本人自身あるいはその父親がウオーリック伯家に仕えていた者である。⁽¹⁵⁾ かつてネヴィル一族に仕えた者たちにとって、故伯爵の娘婿とはいえ、リチャードはかつての主人の敵であるから心中複雑であったとは思われるが、リチャードは彼らを信頼して、できるだけ元の地位に留めて厚く処遇した。

たとえば、サー・ジョン・コニヤーズ (Sir John Conyers) を見てみよう。彼はホーンビィ城 (Hornby Castle) の城主であり、長年ネヴィル家に仕えてきた。弟のウィリアム (William Coneyers) はリーズデイルのロビン (Robin of Redesdale) と呼ばれ、1469年にヨークシャーで頻発した反エドワード四世の反乱の首謀者であった。もちろんこれはエドワード四世の追い落としを謀るウオーリック伯の命令によるものであった。このことからウオーリック伯の信

頼がいかにあつかったかがわかる。兄のジョンは、ミドルハムの執事を務め、13ポンド6シリング8ペンスの俸給を得ていた。しかし1471年には、彼は一族を引き連れてリチャードに帰順したために、リチャードは彼をそのままミドルハムの執事として留任させたばかりか、彼の俸給を20ポンドに昇給させた。このほかにも彼はミドルハム城の管理長官として16ポンド13シリング8ペンスを与えられている。リチャードが出世するにつれてジョンの地位も上がり、年俸200マークの俸禄とそれに見合う領地をヨークシャー内に付与された。⁽¹⁶⁾ 彼の帰順がネヴィル家とリチャードの橋渡しとなったことは明らかである。一族のほかの者たちも皆リチャードに仕えたが、兄弟だけで25人いたというから、「いざ出陣」となったときは頼りがいのある一族であった。

ジェイムズ・メトカルフ (James Metcalfe) はミドルハムから5マイルほど谷を上ったところにあるナパ (Napa) の旧家出身である。彼は一族では最年少であったが、1460年代にはウオーリック伯の俸給録に名前が載る9人のうちの一人であった。1471年にリチャードに帰順したときは、6ポンド13シリング4ペンスという微禄であったが、1483年には突然、ランカスター公領平衡法裁判所大法官という大役に抜擢される。1484年には、年収100マークの収入のあるベドフォードシャーの所領も与えられている。兄のマイルズ (Miles Metcalfe) は、法律家で1460年代には、ウオーリック伯の司法長官を務めていたが、後にリチャードの評議会の一員となり、リチャードがヨーク市の有力者に推薦して市の記録官となった。リチャードがエドワード五世の摂政になった時にはランカスター公領の首席執事代理を務め、1483年の5月26日にはランカスター・パラティン州の判事となった。⁽¹⁷⁾

このようにリチャードは旧ネヴィル家の家臣を厚く遇したために、彼らはリチャードに心酔し、リチャードを支える強力なバックボーンとなっていった。ネヴィル一族は北の有力者であったが、ヨークシャーはヨーク家にとっても昔から金城湯池であった。そのためにこの地には昔からヨーク家に仕えた者も多く、この中からもリチャードの腹心が育っていった。一例としてサー・ジョン・サヴィル (Sir John Saville) を見てみよう。サヴィル一族はヨークシャーのウ

エスト・ライディング (West Riding) の有力な一族で代々ヨーク家に仕えた。ソーンヒル (Thornhill) に領地があり、この近くにはリチャードの父でバラ戦争を始めたヨーク公リチャードの城のひとつサンダル城 (Sandal Castle) がある。一族はサンダル城の管理長官を務めてきた。ジョンはリチャードの家臣になってから俸給もぐんぐん上がり、1484年にワイト島の管理長官となったときには俸給 200 ポンド、なんと 2 倍に昇給していた。(18)

ジェイムズ・ハリントン (James Harrington) はランカッシャーのホーンビィを本拠とする一族の出であるが、一族はヨークシャーにも多くの所領を持っていた。代々ネヴィル家に仕え、父のトマス (Thomas Harrington) はウオーリック伯の父、ソールズベリ伯に仕えた旧臣であったが、1471年にウオーリック伯が国王に反旗を翻すと、彼と袂を分ってエドワード四世の宮内府に入り、騎士として仕えた。1471年の内乱の際、ウオーリック伯が家臣団の全てを引き連れていけなかったことは注目すべき事実である。

ひとつには、ハリントン家は、兄弟のロバート (Sir Robert Harrington) を含めて、リチャードとは深いつながりがあったことが原因かもしれない。すでに触れたが、ハリントン家はスタンリー卿と所領をめぐる争い、その際リチャードがハリントン家の味方をしたことがある。なお、ロバートは 1482年のスコットランド遠征の際にバナレット騎士に任命された。リチャードが王位に就くとロバートは年収 326 ポンド 12 シリングの収入のある領地を拝領する。(19)

ヨーク家ゆかりの者は北部出身者ばかりではなかったが、リチャードは彼らを厚く処遇することによって短期間に家臣団の結束を強めていった。この様子をマンチーニは次のように記している。

He kept himself within his own lands and set out to acquire the royalty of his people through favours and justice. The good reputation of his private life and public activities powerfully attracted the esteem of strangers. Such was his renown in warfare that, whenever a difficult and dangerous policy had to be undertaken, it would be entrusted to his discretion and his generalship. (20)

ここから、彼が善意と正義によって人々の忠誠を勝ち取り、公私にわたる評判のよさから、多くの人々の尊敬を集め、また困難や危険を伴うときには彼に決定権や軍の統帥権が与えられるようになったことがわかる。シェイクスピアの描くリチャード三世は、宮廷内で姦計をめぐらし、人々を陥れる悪人として描かれているが、歴史上のリチャードは、宮廷内の勢力争いとは無縁の北部の所領に引きこもり、そこで善意と正義によってしっかりと民心を掌握していたのである。

IV

イングランド北部やスコットランド国境地方は、ウエールズ国境地方と同じく、独立心が旺盛で、ウエストミンスターへの威光が届かない辺境の地とされてきた。そこでは法や秩序の代わりに、独自の伝統と武力による力づくの支配が続いていた。歴代の国王は、この地にネヴィル家、パーシ家といった強力な貴族を送り込んで北の抑えとしていた。両家はともに広大な領地を与えられ、辺境司令長官（Wardens of the Marches）に任ぜられていた。この官職は私兵を養うことが許されていた。この二大勢力は姻戚であったにもかかわらず、バラ戦争の初期には激しい抗争を演じていた。パーシ家はランカスター派、ネヴィル家はヨーク派として多くの戦に参戦した。パーシ家は第2代ノーザンバーランド伯ヘンリィ・パーシが、ヨーク家とランカスター家が最初に衝突したセント・オルバンズの戦で死亡し、同名の第3代ノーザンバーランド伯もタウトンの戦で戦死した。そして幼いヘンリィ・パーシはロンドン塔に監禁されてしまった。こうして、ランカスター派の有力貴族であったパーシ家は没落し、キング・メイカーと恐れられたネヴィル家の当主ウオーリック伯が北部唯一の有力貴族となった。しかしウオーリック伯がクラレンス公ジョージを巻き込んで内乱をおこすと、エドワード四世は、1469年に獄中にあったヘンリィ・パーシを釈放して、翌年ノーザンバーランド伯位を復活し、ウオーリック伯を牽制した。混乱の中で、1470年、バーネットの戦いでウオーリック伯が戦

死したために、イングランドの北の守りはリチャードとヘンリー・パーシィが担うことになった。しかし、パーシィにノーザンバーランド伯位を復活するという約束はなかなか実行できなかった。というのも、タウトンの戦の後にノーザンバーランド伯位は一時没収されて、ウオーリック伯の弟ジョン・ネヴィル(John Neville 1431-71)に与えられていたために、ここから複雑な政治問題に発展した。ジョンはウオーリック伯の弟であるにもかかわらず、第二次内戦の時は慎重にエドワード四世と戦うことを避けていた。しかし、エドワード四世はジョンを信用せず、モンタギュー侯爵(Marquiss of Montagu)という名ばかりで実態のない位をジョンに与えて、ノーザンバーランド伯位を取り上げ、かつての所有者パーシィ家に戻したのである。このような背景があったために、議会はパーシィの叙爵を簡単に承認せず、パーシィが晴れて伯爵として公認されたのは1473年になってからであった。このような複雑な経緯を経て、第3代ノーザンバーランド伯ヘンリー・パーシィはパーシィ族としては初めてヨーク派に名を連ねることとなった。このときパーシィはやっと20歳になったかならないかの若い当主であった。ここに18歳のグロスター公爵家、20歳のノーザンバーランド伯爵家という二人の若い貴族が北の守りにあたることとなった。

しかし、ウオーリック伯とネヴィル家の影響力が喪失した後も、北部には抗争の芽が残っていた。当時、リチャードのほかに北部で勢力を持っていたのは、ノーザンバーランド伯位を回復したパーシィのほかに、名門貴族トマス・スタンリーとダラム司教のロレンス・ブースであった。

内乱中の政治的な理由から、エドワード四世の肝いりでノーザンバーランド伯位を復活してもらったとはいえ、かつてはウオーリック家しのご勢力を誇ってきたパーシィは昔日の栄光が忘れられず、表面上はともかく、心の中では複雑な思いがあったと思われる。ノーザンバーランド伯位を復活したパーシィ家の所領はリチャードの所領をしのご、北部最大の貴族であったために、リチャードが継承したとはいえ、積年のパーシィ家対ネヴィル家という対立の図式を放置しておくことはきわめて危険であった。しかも、北部におけるネヴィ

ル家とパーシィ家の利権は複雑に入り組んでおり、引き続き抗争の根は残っていた。これでは到底スコットランドの脅威に対抗できない。当時スコットランド情勢は不穏で、イングランドにとって北の脅威に備えることは焦眉の急であった。そこでエドワード四世は1474年に、リチャードとノーザンバーランド伯の間に協約書を作成させて、権限を明確にするとともに、両者の協力を誓わせた。

Indenture between Richard Duke of Gloucester and Henry Percy Earl of Northumberland, 28 July 1474.

This indenture made the 28th July [1474] between the right high and mighty prince Richard Duke of Gloucester on the one part and the right worshipful lord Henry Earl of Northumberland on the other... [The earl] promises and grants to the duke to be his faithful servant, the duke being his good and faithful lord. And the earl to do service unto the duke at all times lawful and convenient, when he by the duke shall be lawfully required, the duty of allegiance of the earl to the king's highness... first at all times reserved. For which service the duke promises and grants to the earl to be his good and faithful lord at all times.... Also, the duke promises and grants to the earl that he shall not ask, challenge or claim any office or offices or fee that the earl has of the king's grant.... And also the duke shall not accept or retain into his service any servant or servants that were or are by the earl retained of fee, clothing or promise, according to the appointments taken between the duke and earl by the king's highness and the lords of his council at Nottingham 12th May [1473].

この協約は、ノーザンバーランド伯爵をグロスター公爵の忠実なる僕としてその配下に置くことを明記するとともに、公爵が「常に伯爵に対して善良かつ忠実なる事」を約束し、伯爵が国王から認可されたる領地、つまりノーザンバーランド、及びヨークシャーのイースト・ライディング (East Riding) にはいっさい容喙しないことを取り決めたものである。これによって、パーシィは北部

では最大の自領の統治権は認められたものの、緊急時には、国王の代理人たるグロスター公リチャードの臣下として忠誠を尽くさねばならないことが明記された。これは明らかにリチャードにとっては有利な協定であるが、囚われの身から開放され、伯位を復活してもらったばかりのパーシィは、これをぐっと飲み込んで、初めての「ヨーク派のノーザンバーランド伯」という試練に耐えたのであった。このようにして沈潜していた不満ゆえに、ノーザンバーランド伯はボズワースの戦いの決定的な時に兵を動かさず、これが、ヨーク派の敗北の一因となったと主張する学者もいる。だが、ノーザンバーランド伯は、リチャードのスコットランド遠征時にはその副官的役割を果たし、その後の第二次宮廷革命のときも北部の兵を率いて駆けつけ、リヴァース伯らの処刑という重大な局面にも活躍した。また、ボズワースの戦いの後に、ヘンリー七世が貢献を認めたのは裏切りを明確な形で実行したスタンリー卿だけで、軍を動かさなかったノーザンバーランド伯の貢献をまったく認めなかった。いずれにせよ、この時点では、イングランドの積年の懸案であった北部での対立が解消し、「スコットランドへの備え」が完成したことを高く評価すべきであろう。

トマス・スタンリー (Thomas Stanley 1435-1504) もリチャードの北部進出により、影響をこうむった一人であった。スタンリー家との間には、ランカスター公領の主任執事役召し上げの事件も沈潜していたが、より直接的にはスタンリー家とハリントン家がロンズデイル (Lonsdale) のホーンビィ (Hornby) に関して争った際に、リチャードがハリントンに肩入れしたことが原因で、スタンリーとリチャードの対立に至った。ハリントンは元々ウオーリック家に仕えた家臣であったが、新しくリチャードの旗下に入った臣下であったために、リチャードがハリントンを擁護するのは当然であるが、この問題が決着するのは1474年になってからである。しかし、スタンリー家の主な領地はチェシャー (Cheshire) やランカッシャー、および北ウエールズであったから、リチャードと権限が重なることはなく、二人の間の溝は埋まったように見えた。ここでも、スタンリー伯の裏切りがボズワースの戦いの帰趨を決したために、「スタンリーが裏切ったのはこのときの争いも絡んでいる」という説は、うがった後

知恵に過ぎない。スタンリーも、リチャードがスコットランドに遠征した際には、ノーザンバーランド伯とともにリチャードの脇を固め、3人はイングランドの旗の下に結束してスコットランドと戦った。また、これに続く第二次宮廷革命においてもスタンリー一族はリチャードに見方をしているからである。ボズワースの戦いにおけるスタンリー兄弟の寝返りは、スタンリーの後妻となったマーガレット・ボフォートの懇請はもちろんだが、さらに複雑な政治的な背景によるものである。これについてはボズワースの戦いの項で考察する。

リチャードの北部への進出で影響を受けたもう一人の人物はダラムの司教ロレンス・ブース (Laurence Booth c.1420-80) であった。ブースはランカスター派であったが、エドワード四世が即位してからはヨーク派に転向し、ダラム司教としてヨーク家を支えた。やがて信頼を得て、エドワード四世の国璽尚書となった。エドワード四世の第三王女シシリー (Cecily) とスコットランド王ジェイムズ三世の皇太子ジェイムズ (James) の婚約の話が出たときは、エドワード四世の特使としてスコットランドとの交渉に当たるなど王家の信頼も厚かった。聖職者であったが、北部では3本の指に数えられる有力者で、特にダラム州においては最大の土地所有者であった。彼はバーナード城の所有権、ダラム州の統治者の地位をリチャードに奪われて、不満を募らせていた。しかし、リチャードの影響が増し、その推挙もあってヨーク大聖堂の大司教に栄転するという幸運に恵まれると、不満は一挙に解消した。リチャードは家臣のウィリアム・ダドリィ (William Dudley 在位 1476-83) をダラム司教に送り込み、州内の世俗支配権をリチャードに移譲させた。こうしてリチャードは自らの有力家臣を州の行政機関と同時に宗教界にも配した。次にリチャードは、ダラム大聖堂、さらにはヨーク大聖堂との関係を深め、自らの影響下においていった。

リチャードは、着々と北部の権力を手中に収めていったが、それぞれの州では依然としてほかの大貴族が勢力を持っていた。たとえば中心となるヨークシャーでは、エドワード四世やヨーク大司教の所領がリチャードの所領をしのぎ、ノーザンバーランド、カンバーランドではノーザンバーランド伯が最大の所領を持っていた。ウエストモアランドではウエストモアランド伯、ダラムで

はダラム司教がそれぞれ最大の所領を持っていた。これらの弱点を補い、名実ともにリチャードを北部の実力者にしたのは、スコットランド軍のイングランド侵攻という事件であった。この事件はイングランドにとっては不幸な事件であったが、軍人、政治家としてのリチャードの優秀性を内外に示し、エドワード四世に次ぐ実力者たることを内外に示す絶好の機会となった。

V

1480年になるとスコットランド国境には不穏な動きが目立つようになってきた。イギリスとスコットランドは協定を結んでおり、しばらくは平穏な日々が続いていたのであるが、ここにきて国境付近で事件が連続するようになった。それまでも穀物や家畜を略奪目的とした小規模な侵略はよく見られたが、スコットランド側の攻撃とその陣容は今までよりもはるかに強力であった。やがて、一連の事件は組織的な攻撃で、それはアングス伯率いるスコットランド軍によるものであることが明らかになった。これはフランス王ルイ十一世が、スコットランド王ジェイムズ三世を盛んに扇動し、その口車に乗ったジェイムズ三世の肝いりによるイングランド攻略であった。これに対抗してエドワード四世は、1480年5月12日、リチャードを北部地区統監 (Lieutenant-General of the North) に任命したのであった。⁽²²⁾ これは北部国境地域およびその隣接地域において国王に代わって軍隊を統率し、徴兵権を与えるもので、後にこれにヨークシャー、カンバーランド、ノーザンバーランドが加えられた。これで北部におけるリチャードの統帥権は不動のものとなった。

夏になってアングス伯率いるスコットランド軍はイングランド領内になだれ込み、国境から20マイルほど南にあるバンバラ (Bamborough) を焼き討ちにした。これを聞いたリチャードとノーザンバーランド伯は、それぞれの家臣団と北部国境地域から徴兵した軍隊を率いて迎撃した。しかし、両軍が激突することはないまま、大規模な軍隊を動かせる夏は過ぎた。

1480年11月のウエストミンスターにおける評定で、翌1481年の夏にスコッ

トランドに侵攻する計画が決定され、大規模な準備が始まった。今回はエドワード四世自ら指揮を執るということで、リチャードに北部地区統監の地位は与えられなかった。攻撃はジョン・ハワード (John Howard) 率いるイギリス艦隊がエディンバラ郊外のファース・オヴ・フォース (Firth of Forth) を襲撃し、かなりの損害を与えたものの、陸上からの進撃がなされることはなかった。エドワード四世自身の出陣準備が整わず、また、決断が遅延する間に夏の戦機が過ぎてしまったためである。1481年から82年の冬の間小規模な戦が断続的に繰り返され、イングランド軍はスコットランド軍に占領されていたベリック城 (Berwick Castle) を包囲したが、落城させることはできなかった。

1482年になると、リチャードを総指揮官として新たなスコットランド侵攻が計画された。これはイングランド側が戦費も人員も惜しみなくつぎ込んだ大作戦であった。ポリドール・ヴァーシルの記述を見てみよう。

[The] Scottish king... broke truce with England, and molested the borders thereof with sudden incursions; wherefore King Edward, with great indignation, determined to make war upon Scotland... [Therefore] he addressed forthwith against the Scots Richard his brother, Duke of Gloucester, Henry the fourth Earl of Northumberland, Thomas Stanley, and the Duke of Albany, with an army royal.... (24)

スコットランドの侵略に怒ったエドワード四世は直ちにスコットランド討伐の軍を起こすのであるが、この記述の中に「王弟グロスター公リチャード、第四代ノーザンバーランド伯ヘンリー、トマス・スタンリー」に続いてオルバニー公アレクザンダー (Duke of Albany, Alexander Stewart 1454-85) の名前があることに注目したい。オルバニー公はスコットランド王ジェイムズ三世の弟で、対イングランドの強硬派として知られていたからである。

これについては多少の説明が必要であろう。ジェイムズ三世は、1460年、わずか8歳で即位したが、14歳のときに下層貴族と結んだボイド一族 (Lord Boyd of Kilmarnock) に軟禁され、ボイド家のロバート (Robert Boyd ?-1471)

が摂政として国政を壟断した。ボイド一族が外交交渉で国を空けた機会に、反対派がクーデターを起こして、ジェームズ三世は親政に乗り出すことができた。しかし、王は下層階級出身の「とりまき」を重用し、古くからの貴族たちを遠ざけた上に、軍事的、政治的な指導者としての能力にも欠けていた。しかも肉親に対して異常なほどの猜疑心を持ち、1479年には弟のオルバニー公を逮捕し、ついでにもう一人の弟のマー伯をも逮捕した。オルバニー公はフランスに脱出したが、哀れなマー伯は獄中で死を迎えた。このオルバニー公が敵の敵は味方とばかりにイングランドに援助を求めてきたのである。これはイングランド軍にとっては思わぬ幸運であった。兄と仲違いをしたオルバニー公はイングランドに亡命したばかりか、スコットランドに侵攻すれば国民はこぞって彼を王座に迎えると主張して、イングランド軍の援助を求めた。

生まれ故郷のフォザリングイ城 (Fotheringhay Castle) でオルバニーと会見したリチャードは、領土や外交などあらゆる点でイングランドに有利な条約を締結したうえで、援助の約束をした。エドワード四世は、昨年と違って早々と、自らは出陣せずリチャードを総指揮官とする決断を下し、6月12日にリチャードに改めて北部地区統監の位を授けた。エドワード四世は健康に自信がなかったのであろうといわれている。

こうして7月半ばには、約二万名の将兵が結集したのであった。この中には、ドーセット侯爵、エドワード・ウッドヴィル卿など南部出身の諸侯も名を連ねていたが、中核をなしていたのは総司令官リチャードと、それを補佐するスタンリー卿とノーザンバーランド伯配下の将兵であった。

The Duke of Gloucester, entering Scotland, wasted and burned all over the country, and, marching further into the land, encamped himself not far from his enemies; when, perceiving that not one man of all the Scottish nation resorted to the Duke of Albany, he suspected treason, not without cause; wherefore he took truce with King James, and returned the right way to Berwick, which in the meantime Thomas Lord Stanley had won, without loss of many men. (25)

ヴァージルは「スコットランドに入ったグロスター公が街を破壊、炎上させつつ内部にまで軍を進めて、敵の近くで野営したが、誰一人オルバニー公を慕って集まる様子がないのを知って、オルバニー公が裏切ったのではないかと疑った（これは決して理由がないことではなかったのだが）。ゆえに彼は「ジェイムズ国王と協定を結んでベリックに引き返した。ここは程なくしてトマス・スタンリー卿が多く兵員を失うことなく攻め落としした」と簡単に記述しているが、詳しい事情は次のようである。

イングランドの大軍を見てベリックの町は抵抗することなく開門したが、ベリック城は天然の要害に守られた堅城で、難攻不落を誇っていた。そのために守備隊は城門を固めて籠城を決意した。この城は海を背にした断崖の上にあったうえ、陸に面した側も絶壁で、唯一の道が街に通じていたが、ここも強固な城壁に守られていた。このためにイングランド軍は無用な損傷を避けて、そのままエディンバラ目指してさらに北上した。

リチャード率いるイングランド軍は大軍のうえ、オルバニー公に王位を継承させて親ヨーク王朝のスコットランド王国の建国を目指すという大儀があったために意気盛んであった。しかし目指すスコットランド軍はなかなか姿を現さなかった。

このときスコットランド側では思わぬ事態が持ち上がっていたのである。イングランドの後ろ盾で、弟のオルバニー公が王位を要求していることを知ったジェイムズ三世は、イングランド懲罰の大遠征軍を組織せざるを得ない状況に追い込まれた。7月22日、王はローダー（Lauder）に各部隊の集合を命じた。しかし二万のイングランド軍に対抗できるスコットランド軍を集めるのは簡単ではなかった。また、かねてからジェイムズ三世の取り巻きの寵臣と貨幣の改悪（Black Penny）などの政治に不満を募らせていた貴族たちの不満がついに爆発した。一部の貴族が実力行使に出て、ジェイムズ三世を捕らえて監禁するという挙に出たのである。取り巻きの寵臣たちも一網打尽に逮捕され、ローダー橋（Bridge of Lauder）で見せしめのために首をくぐられた。イングランド軍懲罰の軍を召集に赴いたはずの王は、逆に自分が虜囚として連行され、エディン

バラ城に監禁されてしまった。

思わぬ展開はリチャードやイングランド軍を拍子抜けさせたが、リチャードがもっとも当惑したのはオルバニー公が、せつかく王位を手にする機会を与えられながら、兄から領土の保全と身分を保証されると、さっさとこれを受け入れてしまったことであった。リチャードはこれを拒否してエディンバラを占領・略奪・焼き討ちしたりすることもできたはずであるが、オルバニー公との当初の約束を遵守し、兵に規律を守るように徹底した。当時の慣習では、略奪は勝者の当然の権利として認められていたために、後にこの点でリチャードは非難をこうむることになるのであるが、律儀に約束を履行する紳士的な態度に好感を寄せるものも多かった。⁽²⁶⁾ 結局リチャードは、オルバニー公と取り交わした条約の履行を約束させ、エディンバラ市民に、以前エドワード四世の妹シリィとジェイムズ三世の後継者ロスシー公ジェイムズ (James, Duke Rothesay)⁽²⁷⁾ との婚約に際してイングランドが支払ったお金の返還を約束させて、軍隊を引き上げることにしたのである。イングランド軍は戦闘を中止して放置しておいたベリックに戻ったが、籠城兵の内、約 1700 名は故郷に逃げ帰っていた。最後までがんばった忠実な城兵も二週間あまりの籠城の後、もはやエディンバラからの援軍のないことを悟って 1482 年 8 月 24 日に降伏した。スコットランドとイングランドの間をいく度か揺れ動いたベリックはこのとき以来イングランド領となり、今日に至っている。リチャードのスコットランド遠征はほとんど将兵を失うことなく目的を達したという点で大勝利であった。

勝利の知らせはロンドンに伝わり、国民は熱狂して勝利をたたえた。その一端は、エドワード四世がローマ法王シクストゥス四世 (Sixtus IV 1414-84, 在位 1471-84) にあてた手紙の中で「わが最愛の弟に対する神のご加護を感謝します。弟の成功は赫灼たるもので、スコットランド王国全体を懲らしめるためであっても、彼一人でことたりたであります」⁽²⁸⁾ と述べていることを見ても当時の雰囲気伝わってくる。スコットランド大使を務めていたアーチボルド・ホワイトロウ (Archibald Whitelaw) は、「軍事技術の化身であり、最良の軍指導者に求められるあらゆる資質を備えている」⁽²⁹⁾ と最大級の賛辞を送っ

ている。もっともこれは、リチャードのいる席での発言であるから、多少割り引いて考える必要があるだろう。1483年、議会は異例にも、リチャードをはじめ、ノーザンバーランド、スタンリー、それにあまたの諸侯、騎士を「スコットランド戦争において、祖国の防衛のために、国王に対して尽くした高貴なる偉業、行動、軍務ゆえに」⁽³⁰⁾ 祝賀行事を行っている。このような世論を背景に、エドワード四世は、リチャードにカンバーランドをパラティン所領とすることを認め、さらに今後彼が自由にスコットランドを征服して自らの所領とする権限を与えたのであった。

すでに述べたように、パラティン州は国王の権限が及ばない半ば独立した州である。エドワード四世は、スコットランドとイングランドの間に、大規模なパラティン州を作って緩衝地帯とし、ここをリチャードに委ねたのである。これは、いわば敵対するイングランドとスコットランドの間に新しい公国を創設したようなもので、北部におけるグロスター公リチャードの基盤を磐石のものとした。

しかし今日の歴史家はリチャードのスコットランド遠征の成果を必ずしも高くは評価しない。それは、後世の資料、特にテューダー王朝時代の資料が否定的な見解を示しているからである。その辺の事情を『クローランド年代記』から見てもみよう。

On top of this confusion in Anglo-French relation the Scots shamelessly broke the thirty years' truce we had made with them, infavour of the French whose ancient allies they were, and this was in spite of the fact that King Edward had for long paid a yearly sum of one thousand marks as a for Cecily, one of his daughters, who had earlier been promised in marriage to the eldest son of the king of the Scots by a solemn embassy. In consequence Edward proclaimed a terrible and destructive war against the Scots, with Richard Duke of Gloucester, the king's brother, in command of the whole army. What he achieved in this expedition and what large sums of money, repeatedly extorted under the name of benevolence, he foolishly used up

were amply demonstrated by the outcome of the business. Thus, having got as far as Edinburgh with the whole army without meeting any resistance, he let that very wealthy town escape unharmed and returned through Berwick; the town there had been captured at the outset of the invasion and the castle, which held out longer, finally fell into English hands though not without slaughter and bloodshed. This trifling gain, or, perhaps more accurately, loss, for the maintenance of Berwick costs 10,000 marks a year, diminished the resources of the king and kingdom by more than £10,000 at the time. King Edward was grieved at the frivolous expenditure of so much money, although the recapture of Berwick alleviated his grief for a time. This is what the duke accomplished in Scotland during the summer of 1482.. (31)

ここでは、英仏間の緊張の中でスコットランドが、30年にわたる盟約を破り、イングランドに敵対したばかりか、エドワード四世の娘のシシリーとスコットランド王の皇太子の婚約に際して、毎年1000ポンドという大金を払ってきたことさえ踏みにじったことが、エドワード四世にスコットランド討伐を決心させ、グロスター公リチャードを統監とする部隊をスコットランドに向けたことが書かれている。しかし、クローランド年代記の作者はこの遠征の大勝利には一言も触れず、経済的な面をばかりに注目する。すなわち、「リチャードがエディンバラという裕福な年を略奪せずに無傷で放置したままベリックに帰還した」こと、若干の戦闘の後にベリック城は落としたものの、「この戦果は成果というよりは事実上損害であること」、「この遠征には1万ポンドもかかり、ベリック城の維持費だけで年間1万マークかかる」こと、「王はベリック城の奪還でほっとしたものの、このつまらない戦果のために巨額の支出をしたことで頭を痛めている」等々である。このようにリチャードの功績を無視して、欠点を批判する態度は、テューダー王朝時代の資料に共通に見られる評価である。

確かに、オルバニー公の王位継承、スコットランドからの領土移譲といった当初の目標は達せられなかったが、兵を損なうことなくスコットランドを屈服させたことは、公平な目で見れば、見事な勝利である。エディンバラを略奪し

なかったこと、オルバニーの変心に寛大な態度を示したことなどは、一部の兵士の不満を募らせたことは事実かもしれないが、裏を返せば、人間リチャードの正義感や寛大さを示すものである。さればこそ、議会も異例の祝賀を催し、王も破格の恩賞を与えたのである。軍の指揮官としては、背後に海を背負ってがけの上にそびえる堅城ベリックを無視して、一気に大軍を首都に向かわせるというリチャードの戦略が、スコットランド内でのクーデターを誘発したともいえるわけで、そのおかげで流血も最小限でベリック城を落城させることができた。オルバニー公を名義人に仕立ててスコットランド侵攻の大義名分を作り、最小の兵の損失で大勝利を収めたという事実は、むしろリチャードの軍事、外交手腕の高さを立証するものであろう。

VI

スコットランド遠征の成功がリチャードの北部における基盤の確立に重要な役割を果たしたことはすでに述べたが、この遠征のための大規模な徴兵を機に、リチャードが家臣を掌握し、新たに有能な臣下を集めたことも事実である。

この遠征に際しては、リチャードの他にスタンリー卿およびノーザンバーランド伯も、部下を掌握して戦果を上げるために、自分の権限で騎士を任命する権限を与えられていた。当時の騎士はバチェラー騎士とバナレット騎士に分けられたが、上位のバナレット騎士は男爵に続く地位で、自分の^{バナ}旗の下に一隊の臣下を従えて出陣できたことからこの名がついた。1481年に、リチャードはフランシス・ラヴェル、リチャード・フィッツヒュー、トマス・スクループ・オヴ・マサム、ラルフ・グレイストウク、トマス・ラムレー (Thomas Lumley 1408-85) の5人に、騎士の称号を授けている。このなかで、トマス・ラムレー以外は全て、リチャードが少年時代をミドルハム城ですごした竹馬の友であることに注目したい。バナレットは20名であったがすべて北部出身者であった。

ノーザンバーランド伯は18名の騎士を登用したがこれも北部人であった。いよいよ戦いが近づいた1482年にはさらに多くの騎士が召抱えられた。7月

24日、リチャードは新たに騎士を任命した。ノーザンバーランドやスタンリーも同様に任命したが、リチャードの任命した騎士は49名にのぼり、数では圧倒的に多かった。リチャードが任命したなかで、サー・エドワード・ウッドヴィル (Sir Edward Woodville 1455-1500)、サー・ウォルター・ハーバート (Sir Walter Herbert 1440-1507?)、サー・ジョン・エリントン (Sir John Elrington ?-1483)、サー・ジェイムズ・ティレルの4人を除いて全員が北部人であったことに注目したい。⁽³²⁾ このときリチャードが抜擢した人々の大部分が、その後リチャードの手足となって働いた。

リチャードがいかに北部人を重用したかは、尚書部の記録で明らかである。その治世中に、国王直属の王室家政部門の32名の騎士のうち15名がヨークシャー、ランカッシャー、カンバーランド、ウエストモールランドの北部4州出身者であった。同じく、34名の準騎士の内13名が北部出身者であった。国王の日常の政務を処理し、国事遂行を補佐するために常設されていた評議会においても、15人の男爵のうち8人が北部人であり、23名の平民の評議員のうち5人が北部人であった。ガーター勲章は国王の寵愛のほどを量るもっとも重要な勲章である。リチャードの治世には7人の枠しか空かなかったが、このうちの6人を北部人が占めている。すでに述べたフランシス・ラヴェル、リチャード・ラトクリフ、トマス・スタンリー、ジョン・コニャーズ、それにトマス・バー (Thomas Burgh c.1463-1507) とリチャード・タンストール (Richard Tunstall 1427-1492) である。⁽³³⁾

以上から、リチャードがいかに北部の人材を重用し、また彼らがリチャードの宮廷や軍事面で重要な役割を演じていたかが分る。

しかしながら、このようなリチャードの北部人脈偏重政策は、諸刃の剣でもあった。つまり、かつてイングランドの屋台骨をもって任じていた南部人、なかんずくロンドン子の反発を招くこととなるからである。まだこの時点では、イングランドにおいて南北の対立が政治問題になることはほとんどなかったが、南北の間に大きな壁があることは確かであった。それはカンタベリー大司教とヨーク大司教という二人の大司教と、それぞれが管轄する二つの司教区

のように目に見えるものもあるが、多くは生活や文化のような不明確な、しかし、当事者の間では厳然とした違いであった。たとえば、独特の北部訛りは南部人には聞き取りにくかったし、たとえ解っても、いたく耳障りであった。変なおいのする北部の料理やビールにロンドン子は顔を背けたのであった。こうした反感は、普段は表に出ることがないが、何か事が起きると一挙に表面化するものである。たとえば、後にリチャードの側近として政権奪取に貢献したバッキンガム公が反乱を起こすが、その後任には大勢の北部人が送り込まれる。この乱で領地を没収された南部諸侯に代わる北部諸侯の任命は、忠実なものを厚く遇するという意味で、支配者からすれば当然なのだが、領民から見れば「外部からの支配」と映り、やがて「北部人の圧制」として民心の離反を招くのである。

以上見てきたとおり、リチャードは一貫して北部の人々を重用して王座に上り詰めた。しかし、全イングランドを統治する国王となると、その支持基盤が特定の地域、人々に限定されるというのは大きな弱点である。リチャードは、かつて兄のエドワード四世が、妃の親戚であるウッドヴィル家やグレイ家の人間ばかりを重用したことが、臣民の離反を招いたことを身をもって知っていた。にもかかわらず、彼はイングランド各地に散らばる領地を次々と北部の所領と交換することによって、北部に領地を集約していった。これは北部における彼の基盤強化には役立ったが、一方で彼を北部の雄に限定するものであった。実際、エドワード四世の晩年に彼は北部に閉じこもり、そのことが南部においてウッドヴィル一族の跳梁を許すことになった。これは逆に見れば、彼がシェイクスピアの描くリチャードとは違って、エドワード四世の死まで、イングランド全体を支配しようなどとは考えていなかったことを示すものではなかろうか。

リチャードが北部を完全に掌握したことが、彼を権力の頂点に押し上げた原動力であった。それが政権の崩壊過程では逆に彼の弱点となるわけであるが、それには他のさまざまな要因が複雑に絡み合う。それらについては次稿にゆずることにする。

Notes

- (1), Plaidy, Jean, *The Reluctant Queen: The story of Anne of York*, Three rivers, 1990. 本名は Eleanor A.B. Hibbert といい、多くのペンネームを使い分けて 200 以上の作品を書いた。もっとも有名なペンネームは Victoria Halt である。
- (2), Cheetham, Anthony, *The Life and Times of Richard III*, George Weidenfeld and Nicolson Limited, 1972, p. 44.
- (3), Ross, Charles, *Richard III*, University of California Press, 1981, p.49.
- (4), Hicks, Michael, *Richard III*, Tempus Publishing Ltd., 1991, p. 57.
- (5), Horrox, Rosemary, *Richard III, A Study in Service*, Cambridge University Press, 1989, pp. 37-38. なお、ホロックスによればトマス・ハドルストーンについては、すでにウオーリック伯に仕えていた時代に死亡していた可能性があるという。つまり、祈祷名簿に入ったのはもっぱら父ジョンや一族のその後の貢献と、寄進の代理人というジョンの力であるというのが著者の主張である。
- (6), op. cit., Ross, p. 56. cf. York Civic Records, I, 73; CC, 489.
- (7), 尾野比左夫, 『リチャード三世研究』, 溪水社、1999, pp.124-5.
- (8), op. cit., Hicks, p.136.
- (9), ibid., p.136.
- (10), op. cit., Ross, pp. 24-6.
- (11), *Chancery Patent Rolls* by Keith Dockray, Richard III, *A Source Book*, Sutton Publishing, 1997, p. 32.
- (12), op. cit., Ross, p. 25.
- (13), op. cit., *CPR*, p. 32.
- (14), ibid., p. 32.
- (15), op. cit., Ross, p. 50.
- (16), op. cit., Horrox, p. 49. cf. op. cit., Ross, p. 50.
- (17), op. cit., Ross, pp. 50-1. cf. op. cit., 尾野比左夫、p. 94.

- (18), *ibid.*, p.51.
- (19), *ibid.*, p.51. cf. *op. cit.*, Horrox, p.42. cf. *op. cit.*, 尾野比左夫、p. 95.
- (20), Mancini, Dominic, *The Usurpation of Richard III*, Translated and with an Introduction by C.A.J. Armstrong, Alan Sutton, 1989, pp. 63, 65.
- (21), Indenture between Richard Duke of Gloucester and Henry Percy Earl of Northumberland, 28 July 1474, by Keith Dockray, *Richard III, A Source Book*, Sutton Publishing, 1997, p. 32. cf. *England under the Yorkists*, ed. I.D. Thornley, pp. 147-8
- (22), *op. cit.*, Hicks, P.77.
- (23), Cheetham, Anthony, *The Life and Times of Richard III*, George Weidenfeld and Nicholson Limited and Book Club Associates, 1972, p. 97. *op. cit.*, Ross, P.45.
- (24), Vergil, Polydwe, *The Anglica Historia*, 169-70. *op. cit.*, Dockray, p.39.
- (25), *ibid.*, p. 39.
- (26), *op. cit.*, Hicks, pp. 78-9. *op. cit.*, Ross, pp. 45-8.
- (27), Duke of Rothesay はスコットランドにおける最高の公爵位でイングランドのコーンウォール公爵に匹敵する。
- (28), *op. cit.*, Hicks, p.79.
- (29), *ibid.*, p.79.
- (30), *ibid.*, p.78.
- (31), *Crowland Chronicle Continuations:1459-1486*, by Nicholas Pronay and John Cox, Richard III and Yorkist History Trust, 1986, pp. 147, 149.
- (32), *op. cit.*, Ross, p.45.n.
- (33), *ibid.*, Ross. pp.56-8.